



1993 年 (平成 5 年)
12 月号 (No. 583)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目 次

皇帝の冠に立つ……………	1
小田稔会員・文化勲章受賞……………	2
劉忠徳中国文化相一行の歓迎会……………	2
今西錦司氏を偲ぶ会……………	2
自然保護随想……………	3
報告……………	

気象観測報告会……………	4
秋の撮影会・宝剑岳周辺……………	4
平成五年度新入会員の集い……………	5
海外登山基金委員会・報告……………	5
キルギスタン偵察……………	6
第 293 回・三水会現地集会……………	6
プラスチックブーツ・大丈夫?……………	6
海外の山……………	7
東西南北……………	8
支部だより……………	14
熊本支部 越後支部 北海道支部 図書紹介……………	16
『神の山へ』『山の自然学入門』 『句集・縦走路』『アルパイ ン・ディクショナリー』	

書籍・雑誌受入報告……………	17
山岳会蔵山岳地図録……………	17
会務報告……………	18
ルーム日誌 会員異動 山研・ナムチャ合同募 金応募状況 お知らせ	

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロップ電話
3234 六六五九

皇帝の冠に立つ

クラウン峰初登頂の記録

日本山岳会東海支部

この度は、「日本山岳会東海支部、日中友好皇冠峰登山隊一九九三」に対して、深いご理解と温かいご支援をいただきありがとうございます。私たちは一九九三年七月二十二日から二十九日にかけて、念願のクラウン峰に全員登頂を果たすことができました。公式報告書は、資料整理ができた次第作成する計画ですが、とりあえず本紙面をお借りして、概要をご報告いたします。

*

五月十七日に日本を出発した先発隊六名は、北京、新疆ウイグル自治区の首都ウルムチを経て、シルクロードの十字路カシュガルに十九日に着く。こ

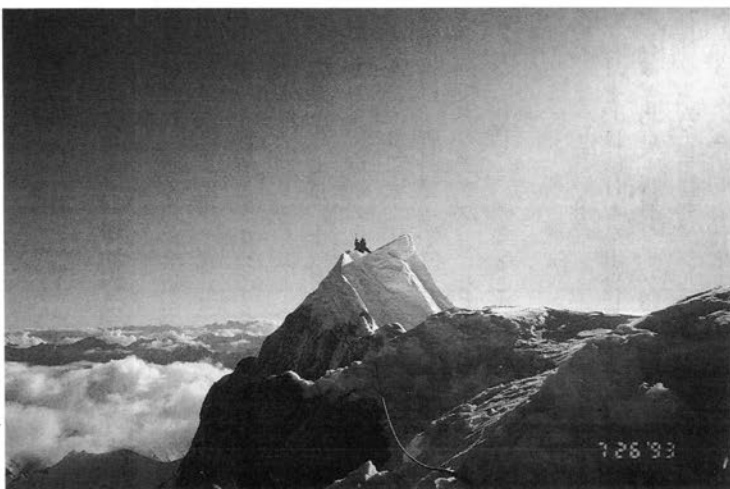
こで、カシュガル登山協会のスタッフと今後の登山計画の打ち合わせ、日本からの隊荷の受け取り、また現地調達食料を購入。この街を日本製四輪駆動車とトラックで出発。シルクロード南路の古い街並みの残るイエチエンを経て軍用道路を下り、アカズ峠(三三〇〇メートル)、マザー峠(四九〇〇メートル)を越え、ヤルカンド河に沿う解放軍の基地マザーに二十二日に着く。翌日、さらに車でキャラバン開始のマザダラまで行く。マザダラには既に、ラクダ五十七頭、ラクダ工二十名が待機していた。

二十三日、ラクダ一頭に一〇〇キロ近い荷物を乗せてキャラバンを開始する。中国カラコルムの大河、ヤルカンド河、スルクワット川に沿ってアギール峠(四七八〇メートル)へ。峠を越えて一気に八〇〇メートル下るとシヤクスガム河に着く。河原を西に進みサルボラツゴ河との合流点を南に折れて、チョゴリ(K2)が見え始めると、紅柳の生い茂るインホントンに着く。中国側スタッフのベースキャンプである。さらに一日キャラバンを進め、五月二十九日、中国最大のインスガイティ氷河の舌端四〇〇〇メートルにクラウン峰登山隊のベースキャンプを建設した。

翌日から二日間、アップダウンの激しい氷河上を偵察し、左岸のサイドモレーンに荷揚げルートを決定した。中継キャンプ(四三〇〇メートル)を経て、登山活動の基地となるアドバンス・ベースキャンプ(四四〇〇メートル)をクラウン峰が眼前に聳え立つ第四ルンゼの入り口に六月一日建設。約二・五トンの隊荷の荷揚げは、十九名の低所協力員の支援で、六月九日、異例の早さで完了した。セラックス帯の右岩壁に一ピッチ五〇メートルの固定ロープを二本張り、六月十一日、キャンプ1(五一〇〇メートル)を東南稜基部に建設した。

一方、五月二十七日、日本を出発した七名の本隊は、北京で中国登山協会の方々と細部の打ち合わせを行い、ウルムチ、カシュガル、イエチエンを経て、六月一日にマザダラに到着。翌日からキャラバンを進め、予定より一日早い六月七日にクラウン峰BCに到着し、先発隊と合流した。

六月七日に日本を出発した後発隊の酒井登攀隊長も、十七日にはBCに到着し、全隊員が本格的な登山活動に入った。東壁下部のアイスフォール帯



ノコギリ刃のような皇冠峰頂上稜線

はブロック雪崩の危険を避け、東南稜側に回り込む。凍ったガリー、急な氷雪壁に固定ロープ二十三本を張り、六月二十一日、キャンプ2(五八〇〇メートル)を東南稜末端コルに建設。そこから、雪稜を二〇〇メートルほど直上し、東壁にトラバースを開始した。東壁中央の岩稜を巻きながら上部菱形氷雪壁(ダイヤモンドフェース)の真下まで進み、東壁の直上ルートに登攀に移った。当初六五〇〇メートル付近の

のガリーを突破して、ここに七メートルのワイヤー梯子を設置した。さらに七〇〇メートルを越すあたりまでルートを伸ばす。C3より固定ロープを二十八本張り、登頂態勢を固めた。七月二十二日午前二時三十分、三名でC3を出発。固定ロープの終了点に午前七時に着く。そこから新たに四ピッチ、ルートを伸ばし、午後二時五十分に初登頂に成功。四日間の悪天候後、二十七日に四名、二十八日四名、

氷雪壁帯にキャンプ3を作る予定であったが、氷が堅く、傾斜がきついため適地がなかった。東南稜から数えて五本目の岩稜基部を、一日かけピッケルで氷を削るが、テントスペースができず、さらに

下の四本目の岩稜基部に、三分の一近く空中に飛びだしたキャンプ3を建設した。C2からC3までに二十本の固定ロープを張った。これより上部のキャンプサイトが望めず、位置が低い、最終キャンプとなった。

C3を早朝に出発し、東壁に四パーティーが全力でルートワークを続け、七月十八日には、ダイヤモンドフェースに抜ける核心部の漏斗状の垂直

二十九日三名が登頂し、全員が登頂を達成した。

*

なお、詳しくは『東海支部報、五十二号』(一九九三年十一月一日発行)をご参照ください。(徳島和男)

小田稔会員 文化勲章を受賞

小田稔会員(会員番号八九七一)は、今秋、宇宙物理学のX線天文学分野に関する業績により、文化勲章を受賞された。心からお慶び申し上げたい。同氏は理研理事長のとき、浩宮徳仁親王殿下の本会年次晩餐会へのご出席についても尽力され、夫人と共に年次晩餐会の皆出席会員でもある。人とのふれあいを大切にされる同氏は今回、画文集「花と人」を出版された。併せて報告し、お祝い申し上げます。

ますますご多忙とは拝察するが、会員として、これからはぜひ暇を作って山を楽しみ、高山植物にも得意の腕を振るっていただきたいものと期待しています。(中村純二)

劉忠徳中国文化相一行の歓迎会

十月二十六日、日中文化交流協会主

催の表記歓迎会がホテル・ニューオータニで開かれ、本会からは中村副会長が出席した。徐敦信大使や桜内議員ら列席の中、団伊玖磨氏の挨拶、千田是也氏の乾杯で会は進められた。文化相は交流協会が創設された頃の中島健蔵、井上靖先生らのご努力に応え、今後ますます日中の交流を深めていきたいとの決意と希望を述べられた。

劉文化相と汪大鈞文化連絡副局長は史占春氏の活動もよくご存知で、日本山岳会に対しては、今後も引き続き交流登山を行っていただきたいこと、橋本龍太郎先生始め皆様の健康をお祈りしたいことなど挨拶された。

(中村純二)

今西錦司氏を偲ぶ会

今西錦司先生が亡くなってもう一年半余が過ぎようとしている。それはつい昨日のようなことにも思え、往時を懐かしむ心が誰の胸にも熱くなっていた。たまたま今年のウエストン祭に参加した高木崎男岐阜支部長と斎藤惇生京都支部長の間で「一度先生を偲ぶ会を開いてはどうか」という話が持ち上がり、第一回は岐阜県でお引き受けすることとなった。

先生は京都大学を定年退官後、岡山

大学を経て岐阜大学長を六年間務めておられる。この間はずっとより、その前後にも岐阜の者と多くの山を登っておいでになり、それは美濃や飛驒の山とは限らず、全国の山々にお供している。したがって先生とご一緒に、どなたが登っておられるかを知っているのは、高木支部長の他には、まずいないだろう。

しかし実際、準備を始めてみると、先生と山を通して交際のあった方を網羅することは不可能に近いことを知った。八方手を尽くしたつもりだが、案内を漏らしてしまった方が多々あるものと思われるので、陳謝しておきたい。

さて、会は十月三十日の「偲ぶ会」と翌日の記念登山の二本立てで実施することにした。

「偲ぶ会」は大垣のフォーラム・ホテル(オーナーは井上孝二本会会員・会員番号五六三七)で開催した。いったいどのくらいの方にお集まりいただけるのか分からないので、一応、一〇〇名と限定したが、ちょうどその人数の参加者があった。先生の遺影を正面に置いて、藤平会長、織内元副会長、望月元副会長など六氏から先生の思い出を語っていただき、懇親会に入った。宴半ばする頃から、先生と一緒に山麓の宿やテントで歌った「蒙古放浪の歌」や「月の砂漠」などの大合唱が続



大合唱で今西氏を懐しんだ偲ぶ会

き、ともに声を合わせて歌う中で、先生と過ごしたオールド・グッド・デイズを思い懐かしんだのだった。

翌日は、美濃市近辺の高賀山(一二二四メートル)に登った。この山は、岐阜や大垣から望見でき、山姿がよく日帰りの登山には恰好の山である。幸い昨日の雨も止んで登山日和。山麓の洞戸村高賀を経て標高六〇〇メートル付近の登山口から御坂峠を経て登頂。先生の遺影が到着するのを待ってパンザイと乾杯。今西さんのアゴは長いよロングロングアゴー ロングアゴー」と例の歌を歌ってから下山。

先生の登山年譜によると、この山には一九六〇年十月二十六日に登っておりになるが、その日も今日のように晴れたのだろうか。(高木泰夫)

自然保護随想 保全と安全の 両立

関塚貞亨

首都圏近郊の日帰りハイクにちょうどよい山で、細い丸太を組み合わせた階段の登山道がやたらに増えた。できたばかりの丸太の階段を登ってみる。神社の石段は、ちょうどよい高さで足を交互にあげて登れるが、丸太組の階段は段差が大きく、間隔も適当ではない。踏み出す足も右だけ左だけの同じ足になりやすい。ときどき踏み替えなどをして、疲労を防ごうとすることになる。このようなリズムを崩す山登りは、楽しくはない。また段差の大きい階段の道では、高齢者や、足の弱い者は、登り下りに階段を避けて、道の両側の草地を歩くようになりやすい。

また、風雨に晒されて、盛り土が流されてしまった丸太を組んだ階段ほど始末におえないものはない。登山道は障害物競走のトラックさながらに、組んだ丸太がフェンスのように登山道に立ち塞がり、足の強い者でも、このような障害物をまたいで

歩く気にはなれない。丸太の障害を避けてほとんどの人が、道の両側の草地を歩くようになり、裸地が広がってしまう。登山者が自然を破壊するというのが、むしろ人間性を無視した階段の整備が、環境破壊の元凶といえるのではないか。

危険な登山道は、丸太組の階段だけではない。箱根の湯坂道をまねたつもりなのか、直径十センチから二十センチの丸太を石畳のように埋め込んだ自然歩道と称する登山道がある。箱根の古道は歴史的にみて、保存することに意義がある。しかし、石畳の道は草鞋(わらじ)で歩くには快適だが、濡れた石はゴム底の登山靴では、滑りやすく、捻挫や骨折の危険が大きい。新しく整備する登山道としては、適当とはいえない。

『自然保護とリーダーの役割』というテーマで、滑りやすい登山道をあえて歩いていたら、引率される人から「リーダー、こっちはもうが安全」と裸地のほうを歩こう、と提案され、ジレンマに陥った、という話をしたが、登山者の安全を無視した登山道の整備は、環境破壊を速めるだけだ。自然に調和し、しかも安全な登山道のかたちを早急に考えたい。

REPORT

報告

REPORT

気象観測報告会

ナムチャバルワとマッキンリー

科学委員会

十月十六日(土)午後一時半から日本山岳会館にて、一九九二年九月十月にかけて行われ、十月三十日、無事登頂に成功したナムチャバルワおよびマッキンリーの気象に関する報告会が開催された。

まず奥山嶽から、九月十五日～十一月五日までのBCの天気とその他の特徴を、天気図を用いて解析した報告があった。また登山期間が遅くて強風に悩まされ失敗した一九九一年と、今回の一九九二年の天気の違いも述べられた。

結論は九一年は十月一～十五日にかけてモンスーンのふり返しはあったが(雪崩遭難はその最後の悪天の直後であった)、それ以降は比較的天気はよかった。しかし九二年は九月十月にかけて、モンスーンが終わったと思ったりまたふり返し、いつ終わったのかもはっきりしなかった。いわば九二年は季節の歩みが遅く、十月でもまだ夏の名残が残っている状態だった。

また九一年と九二年の大きな違いは上層風の強さであった。九一年を三〇〇hpa(ヘクトパスカル)の風で見ると、連日五〇ノット(25m/s)以上で最大一〇ノット。今回は十月二十二(二十六日)のみはやや強かったが(最大七五ノット)、他は極めて弱かった。

九〇～九二年の三年間を比べてみると、毎年ヒマラヤ方面の気象状況は大きく違っており、年のくせが大きい。このことから前の年がこうだったから今年もこうだろうとは、とてもいえない。

続いてBCにいる登山隊へ毎日の天気予測を出す立場の飯田肇隊員の報告があった。まず飯田氏はBC、C3に設置した気象測器の観測結果を報告した。次に、今回は特別に軌道気象衛星「ノア」(静止気象衛星「ひまわり」の画像では、ヒマラヤは西端すぎてよく見えない)の受画装置も借用、BCに設置。一日四回受画したがそれが有効だったこと、また最初登頂予定だった十月中旬頃が連日悪天のため、次はいつ登頂できるかの長期予測に苦労した。その予測根拠は日本気象協会経由の気

象庁予想天気図である。十月中旬以降は協会予測担当者のコメントを含めて毎日十二～十三枚もの資料をFAXで送ってもらった(日本気象協会には大変お世話になりました)。

また今回の天気の特徴として、普通の日変化(夜は朝は晴れているが、午後曇って夕方にわか雨)とは違って、日中晴れているが夜になると降水がある、夜間降水型がよく起こった。このため昼間は晴れていても、山の上のほうは前の夜かなりの積雪があって、いつ雪崩るかも知れないので行動できないことがあった(天気図解析の結果、この型は上層前線停滞の場合と下層湿潤の場合の二つの原因がありそうである)。

最後に、大蔵喜福氏のマッキンリーの気象観測についての報告があった。九一年はデブリ峠へ設置した気象測器が強風と氷結のため支柱が倒壊、記録が前半しか取れなかった。九二年は支柱の固定を頑丈に行なった。しかし今回は支柱は大丈夫だったが、支柱につけたセンサーが飛ばされていた。

風の記録によると、九二年は九月十二日午前九時～翌十三日午前八時まで、平均二〇メートル以上の風が吹き、その間断続ではあるが三〇メートル以上があり、また四〇メートル以上も五回記録していた。なお瞬間最大風速は

四五メートルであった。最大値は機器の構造上確実な値ではないので、さらに強い六〇メートルくらいの烈風も吹いたかもしれない。とにかくセンサーが止まった十三日午前九時以後、かなりの烈風が吹いたことが予想される。なお気温は残っていた一つのセンサーの記録では、外気最低気温は零下五一度、補正すると零下五五度くらいであった(九〇年観測での最低は零下五八・三度)。

(奥山 巖)

秋の撮影会

中央アルプス宝剣岳周辺

フォト・ビデオクラブ

秋の紅葉と親睦を兼ね、十月十六日～十七日に中央アルプス宝剣山荘にて二十五名(都合により一名は千畳敷より帰る)の参加者を得て、撮影会を開催した。遠くは秋田県、富山県からご参加をいただき、それだけに当日の天気が気になるところであった。

十六日、東京圏の会員の多くは、新宿七時三十分発、駒ヶ根行きの高速バスに乗り合わせ、ほぼ定刻通り駒ヶ根市に到着した。ここで地元山岳写真家でJAPPA会員の津野、吉村両氏の出迎えを受け、早速、しらび平へと向かう。

千疊敷には午後一時頃到着し、各自簡単な昼食をすませた。ここでヤキトリを差し入れてくださった荒井氏が都合によりお帰りになられたのが残念であった。天候も残念ながら悪化し、雨まじりの強い風が吹き始め、撮影会どころではなくなった。全員身支度を整

え、津野、吉村両氏のサポートのもと宝剣山荘へと向かう。一時間遅れの横浜出発組も到着し、午後四時には全員無事に山荘に集合することができた。夕刻、宝剣山荘支配人吉川氏から差し入れのビールで乾杯し、持ち寄った酒やつまみを取りながら歓談する。自

海外登山基金委員会・報告 平成四年度助成の四隊

委員長 鳴原啓佑

平成四年度に補助金を助成した四隊の登山概要を報告します。

なお、詳細は「山岳」第89年に掲載する予定です。

一、日本山岳会東海支部日中友好皇冠峰登山隊一九九三

中国領カラコルムの未踏峰クラウン(七二九五メートル)。六月七日にBC入りした日本山岳会東海支部隊は東壁ルートを登り、七月二十三日三名が初登頂、その後三度にわたり徳島隊長以下十四名の全員が登頂に成功した。

二、JACC気象観測機器設置登山隊
本会の科学委、青年部、学生部による第四次マッキンリー峰(六一九

四メートル)登山は六月十一日BC入山、六月十九日大蔵隊長以下十名の全員が登頂し、機器の設置、点検、データの回収をした。

三、一九九三年信州大学学士山岳会カラコルム登山隊

パキスタン領カラコルムのバインターブラック峰(七二八五メートル)。四名の信大隊は六月十七日チヨクトイ氷河のBCに入山、七月二十八日悪天候により五八五〇メートル地点を最高にして登山を断念した。

四、日印合同、広島山岳会ヒマラヤ登山隊一九九三

サルトリカンリ西壁から東部カラコルムの未踏峰アク・タシ峰(七〇一六メートル)に転進した広島山岳会隊の七名は七月十八日、ヤンパー氷河のBCに入山、八月五日に五名が南西壁を完登し、八月六日に二名が初登頂に成功。

己紹介後、羽田委員長の撮影技術やフィルムの特性などの説明を受け、明朝の好天を期して八時に就寝した。

翌十七日午前四時半、各自カメラを手に、吉村氏の先導で前岳へと向かう。手が味方したか、時折雲が舞うもまずまずの天気。ハケ岳、甲斐駒、南アの連山、たなびく雲海、朝焼けの宝剣岳など、作品の出来栄えが楽しみな二時間を寒風の中で過ごす。

山荘に戻って朝食をすませ、記念撮影をした後、自然解散となった。ここで富山から参加の石浦氏は列車の都合で一足先に帰宅され、残留組は吉村氏の案内でガスの中、駒ヶ岳の頂上を踏んだ。

正午頃には駒ヶ根に着き、食後、駒ヶ根市民文化センターで催されていたJAPPAと徹岳舎の合同写真展を見学した。津野氏、吉村氏をはじめとする見事な山岳写真を拝見し、今後の我々の活動の一助になったことを喜びとして、吉村氏見送りの中、駒ヶ根を後にした。

最後に、津野氏、吉村氏をはじめご協力くださった皆様に、紙面を借りてお礼を申し上げます。

(北村義男)

平成五年度上半期入会の

新入会員の集い なごやかに開催

十月十六日(土) 十四時より都市センターホールにて、上半期入会者のためのガイダンスが開かれた。参加者四十九名、ガイダンス始まって以来、最多参加者。ルームでは対応できないため、主催者側は急拠会場を変更するなど、うれしい悲鳴をあげた。ルームや図書室を見学後、都市センターに移動、袴田総務委員の司会で、集いは進行された。小倉総務担当常務理事の「会のために自分が何ができるか、肝に命じてほしい」という開会の辞に始まり、中村副会長の「会員で支えられている会であり、クラブ・ライフを楽しんでいるいただきたい」という歓迎の言葉に、日本山岳会の特徴など語られ、積極的な参加が、ひいては日本登山界の活性化につながる、と結ばれた。

次いで、中川総務担当理事から、どのようにして会になじんでいくか、組織についての説明と活動の方法について、クラブ・ライフを楽しむには、仲

次代に残そう美しい山と溪

間に出会うこと、そのためには、参加し、苦勞することから……」と実体験を通して説得された。

九二年度同期会発起人の田上会員より、初めての試みとして、九二年度入会者で同期会を作った話、九三年度の方たちも同期会を作ってはどうか、仲間作りに役立っていることをアピール。前女性懇談会小倉(董)委員より、平成四年で女性懇談会は、発展的解消をしたが、毎月第二火曜日十八時三十分より、女性を中心に「二火会」として再出発したこと、女性会員の仲間作りのきっかけにしてほしい、と十六名参加の女性会員にアピール。約二時間で終了。

二つの会場に分かれ、新入会員の一分スピーチ(自己紹介と会や山に対する思い)を中心に和気あいあい、熱心に語りあった。現在の会員数五二〇〇名、平均年齢五十四・七歳という現状に、ショックを受けた新入会員も、十八歳の澤野久美子新入会員に、熱い視線を注ぐ一幕もあった。ともあれ、年齢を越えた山や仲間に対する情熱は、当山岳会の伝統であり、素晴らしいさでもある。新入会員もまた同じだった。

十七時、再び会場をルームに移し、ビールとサンドイッチのささやかな懇親会が開かれた。中村副会長始め、主催者側の総務委員、新入会員、約七十

名がルームに集い、文字通り肩を寄せ合い、山岳会らしい和やかなパーティーが繰り広げられた。同期会発起人立候補者が出るほどの熱気あふれる集いであった。

(小倉董子)

キリギスタン偵察

数多くの魅力的な山々

青年部

九月四日から十九日にかけて、中央アジアのキリギスタン共和国に偵察隊を派遣した。同共和国観光省の招待によるものである。同隊は天山山脈の西部および中央部に位置する、キリギスタン脈・テルスケイアラウ山脈を偵察した。さらに、共和国での実務的受入れ機関となる登山連盟とも提言書を交わし、来年度以降の日本山岳会からの登山隊に対し、非常に友好的な提案を受けた。

日本では情報も少なく、政情の不安ばかりが伝えられる地域である。そのため、魅力的な山が数多くありながら、今まで登山隊派遣にまで踏み込めなかった。

しかし今回の偵察隊派遣により、受け入れ体制も整い、青年部としても来年度以降の登山活動の場として、具体的に検討を進めていきたい。詳細は青年部・相馬勉まで。

(相馬勉)

第二九三回・三水会現地集會

秋の秩父シリーズ

三条の湯から雲取山へ

秋の秩父シリーズは中止という声が聞かれていたが、久しぶりに三条の湯・雲取山を訪れることに決定し、長年続けられていた山行が中断されることなく、実施されたことは真に喜ばしい。

十月九日、定刻十時三十分、奥多摩駅に全員集合。三連休の初日で満員のバスに揺られ、終点の西鴨沢で下車、バス道の後山林道入り口へと歩き始める。車で追いついてきた木村さんのご好意で、林道終点までピストン輸送をしていただいた。お陰で二十十分には三条の湯に着き、時間を大幅に短縮できた。今日の宿泊客は百三十名とか、場所を確保してまずビールで乾杯。一風呂浴びたのち、夕食までの間モーツァルトを始め持参の銘酒で、たっぷりとお酌の時間を過ごす。

翌十日も好天に恵まれ、七時には平均年齢六三・一四歳の七人の士は斎藤(健)さんを先頭に、下山組に送られて雲取山頂へと出発。沢沿いの道を水無尾根に進む。ところどころ黄ばんだコナラが樹間を明るくしている。

標高五〇メートルほどの目印は、脚を軽快に頂上へと運び上げてくれる。三条ダルミで小休止、小屋を出発して

から約三時間、紅葉にはまだ少し間があるが、ナナカマドの赤い実が青空によく映えている。富士山の冠雪は僅かだが、眺望は満点で疲れを忘れさせてくれる。標高差二五〇メートルを直登のち、十時四十五分に雲取山頂に立った。斎藤さんの初登頂を祝って乾杯! あとは下るばかりで、各自持参の珍味を広げて昼食をとる。

まき道を奥多摩小屋を経て下山する。ブナ坂で鴨沢から登ってきた高田さんと邂逅し、再び大休止をとる。

七ツ石小屋との分岐点を過ぎたところで、待ちくたびれて登ってきた木村さんと合流し、全員揃って四時二十分無事鴨沢に下山した。

定例の反省会のち、奥多摩駅で解散した。下見から実行まで、裏方に徹してお世話くださった木村さん、ご苦労さまでした。

「参加者」乾能尚、岡野修、川上光久、木村俊博、斎藤健治、酒匂輝昌、重村清、高田眞哉、塚原孝志親子、中沢喜久郎、樋口公臣

(乾能尚)

冬山シーズン

あなたのプラスチックブーツ

大丈夫?

遭難対策委員会
新聞や山岳雑誌などの報道でご存じの方も多いかと思われませんが、昨シ

海外の山

幸運の山 チョモロンゾ



江本嘉伸

創立七〇周年を記念して「九二年、チョモロンゾ峰のチベット側からの登頂」を考えついた。しかし、九一年に申請した当時は、「未解放地区だから」と中国登山協会の許可はおりなかった。

一転、慌ただししい展開となったのが今年一月である。中国から「特別に許可する」と言ってきたのだ。それも「九三年」という期限である。短期間にメンバーが決まったのは、大学山岳部の強みであろう。北面からの写真を見た現役学生や若手OBたちは「何よりも山容の素晴らしさにひかれた」と声をそろえる。

五月に偵察隊が出た。九月初め、本隊出発。若手を中心に登攀メンバー八人が荷揚げのノルマを履行し、「自力」でキャンプを進めた。カンシュン氷河左岸のペタンとよばれる放牧地にベースキャンプを設置したのが九月二十日である。

ここからカンシュン氷河を横断してチョモロンゾ氷河をたどり、五三〇メートルにC1、五八〇メートルの台地にABCを設置した。チョモランマ、ローツェを目のあたりにしながらの豪華な登高だった。

登攀の力ぎは、六二〇メートルから六五五メートルまでの懸垂氷河下部の岩稜の突起にあると、考えられていた。ハンク気味で「遠くから見た時は登れるとは思わなかった」と、第一次アタッカー

の武石浩明(二六)は言う。

偵察隊が目撃した上部の巨大な氷のブロックが二つとも落ちていたのが運がよかった。陽のあたらない午前中に岩稜のルートワークを行い、二〇〇メートルのザイルを固定した。十月十日、頂上稜線に続く広い雪原に抜け、十二日、その上部六九〇メートルにC4を作り、アタック体制に入った。

いったん全員がベースキャンプまで下り、休養した後十八日に四人の隊員がC4入りした。十九日、第一次登頂の試みは、強風に阻まれて失敗。C3のテントが吹き飛ばされ、C1、ABCのテントが倒壊する、というすさまじい風だった。

C3を再建した二十四日、地吹雪の中を再度アタック、七五〇メートルで二人が断念したが、武石と高橋克昌(二四)の二人は午後二時四十分、チョモロンゾの頂きに立った。チベット側からの初の成功である。登攀隊員の八人の平均年齢二十五歳、ヒマラヤ経験といっても、トレッキングビザで登れる山がせいぜい、という青年たちが荷揚げからルートワークまでフルに力を発揮したことは、評価されていい。

一九三六年のナンダコート登頂以来、ヒマラヤでは際立った成果のなかった立教大学山岳部が、その伝統を継ぐ成果を上げたのである。

ズンの雪山で登山用のプラスチックブーツの突然破壊が起こりました。幸い死亡事故などの重大事故の報告はされていませんが、雪山でのプラスチックブーツの破壊は事前に予測することが困難で、遭難事故につながらないとは限りません。

現在、その軽量性や防水性、そしてメンテナンスの簡便さから多くの登山者に愛用されていますが、破壊の調査結果として、材質の特性から一定の安全のための耐用年数が存在すること、また水分や湿気による加水分解、紫外線による経年劣化という一般的な弱点のあることも明らかになっています。

山岳四団体(日本山岳協会、日本労働者山岳連盟、日本ヒマラヤ協会、日本山岳会)は、この問題について懇談会を設置し、事故防止に努めていきたいと考えています。

会員の中で、自らプラスチックブーツの破壊を経験されたり、仲間でそのような事故があった場合、本部遭難対策委員会宛て、葉書でご連絡ください。折り返しアンケート用紙を送付します。来年九四年一月末をめどに、実態把握のための調査を行います。ご協力ください。また雪山を目指す皆様には、プラスチックブーツの欠点も念頭におかれ、今冬山に臨まれることをお願いいたします。

(片岡泰彦)

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。



中国雲南省の 四〇〇〇メートル峰

渡辺義一郎

一九九三年九月に、中国・雲南省昆明市北方の轎子山（ジャオズシャン）四二二メートルに登ることができた。登山の概略と雲南省の山岳事情を紹介する。

轎子山は烏蒙山脈の支脈拱王山嶺に属する。轎子は花嫁の乗るカゴのことで、山麓の村からその形に見えるという。今回の登山は、昆明山野旅行社という専門会社から案内人を雇った。

雨季が終わろうとする九月十六日朝七時半、昆明を車で出発。水田とタバコ畑の広がる郊外から、青稞（チンコー・はだか麦）とソバ畑の山村を通り、峠を越えること数回。途中に柯渡、馬街などの地を通り、十四時、最奥の大村・炭山集落先の林道で下車。標高二七〇〇メートル。昆明から一八五キロメートル。ポーターに荷をあずけ、林

道をたどり、やがて主稜から延びる台地状尾根に取りつく。岩壁の迫り出したところを縫うように抜け、広い尾根を放牧の牛や羊を見ながら、時にシヤクナゲや灌木の中を進む。ゆるやかな尾根を登り、ピークを五つほど越える。日が沈み、ライトをつけて下り気味に行き、二十時、やっと山小屋に到着。

十七日は終日雨。山小屋は三七五〇メートルのシラビソ（に似た）林の中にあり、二階建ての小屋の他にログハウス、食堂、カラオケルームなど大小十棟ほどが建つ大きな施設である。昆明市内の旅行会社が共同で、観光地開発のために建設したとのこと。十、六月に宿泊者が多く、冬の雪見や夏のシヤクナゲの花を見にくる昆明市内の人がほとんど。小屋まで来た人は、四〇〇〇メートル付近に広がる高原台地にある天池、妖精池というところへ行つてアルプを楽しむ山遊びが多く、頂上へ行く人は少ない。雪は十二、三月に降り、四〇〇〇メートルを越えて膝ぐらいの積雪という。

十八日晴。小屋番の起床が遅く、朝食を待たされ、十時出発。シラビソ林の中を新しい山道をたどり、東から西へ屏風のように連なる岩壁帯を越える。と、四〇〇〇メートルの地に高原が広がり、高層湿原の中に妖精池（幅三〇メートルくらい）がある。十時四十五分着。ここは測候所の跡で、まだ小さな小屋が残る。池はもともとの池塘を堰止めた水を溜めたもので、広い高原のあちこちに池塘や小さな流れが見られ、とても気持ちのいいところである。この辺りは神仙田と呼ばれている。

東側にはシヤクナゲの大群落がある。湿地の草と花を踏んで、時に岩壁の上を歩き、先に立ちはだかる岩壁を目指す。そこが稜線部らしい。同行した二十歳の女性ガイドは元気がよい。岩壁の草付きバンド状を、かすかに踏み跡らしいものを見つけて登ると頂後で、目の前に轎子山のピークが岩峰となつて東へ迫り出して立っていた。十二時三十分登頂。北方にこの山地の最高峰拱王山雪嶺（四三四四メートル）が見えた。轎子山から一日がかりとのこと。

昆明で地元山岳会である昆明登山旅游探検協会（会員約一〇〇名）を訪問した。活動は熱気球やハンググライダーの他、湖の横断遊泳、瀾滄江の筏下り。登山は拱王山雪嶺を九一年に初登頂。玉龍山（五五九六メートル）は

九一年に四七〇〇メートルまで登っている。雲南省の情報によると、東川市の西にある古牛山（四〇二二メートル）は道がないが五日間で登った。大理の西にある蒼山主峰四一二二メートル（馬龍峰）は、山腹の気象台まで道路があるので、冬と春以外ならそこから頂上までは約五時間という。

梅里雪山は日中合同隊に参加した者がおり、興味がある。玉龍山北方の哈巴雪山（五三三九メートル）は、九四年に計画がある。徳欽県手前の白芒雪山（五一三七メートル、白馬とも）は偵察もされていない。同会では日本の登山愛好者との交流を望んでいることを付記しておく。

麻生さんの魂 メキシコ富士に登る

市川佐江子

メキシコ再訪がようやくかない、半年ほど滞在することになった。計画が遅れたため、とうとうメキシコ第二の高峰ボカテペトル（五四五二メートル）に私の最も年上のお友達、麻生武治さん（六十歳違う）をご招待することができなかった。

スイスの山のことで初めて麻生さんにお目にかかったとき、麻生さんはス

ペイン語をレッスン中だった。八十五歳の手習いだよ、と言っておられた。その後、麻生さんからスペイン語混じりのお葉書を何度か頂戴することになったが、翁はスペイン語圏の山を登

月山の秋

大橋克也

朝焼けの 不気味さ湛え 月山は
鈍色のまま 鎮まりて佇つ

牧の牛 麓に下りて 影もなし

月山の午后に 山毛櫸の散りゆく

雪溪の 潤れたる季の 無の広さ
粗き谷間の 月山の秋

木曾駒、宝剣岳

小林碧郎

園谷に雪待つ紅やななかもど

息白く待つ雲表の日の出なり

冷まじき滝雲燃ゆる朝あかね

円虹や雲中凍る天狗岩

雲搏つて屋根石氷る嶺の神

(カメラビデオ委員会撮影会)

られたことがないということだった。ポボカテペトル山へトレッキングに行きましようよ、と話が弾んだ。三年前の正月、翁と国際文化会館で新年会をしたとき、佐藤テルさん達の

「詩」秋山の心

石田喜八

朝から一片の雲もない
のっぺらぼうの空
錦繡前の緑の山

豪華な白い飛沫と

威風の響きを浴びながら
静謐で光の絢な峠へ着く

ここからの急峻は

都座に侵犯された軀に
晩鐘を鳴らす

しかしすくくと立つ峰の

創瘦の屹立を見ていると
心は百八十度雄気へ変わる

稜線の小突起の如き頂は

樹林に蓋われ
声ひとつない

それにしても今日の晴れ方は

人の心にはありようもないので
歌うよりたじろいでしまうほどだ

グループとたまたま一緒になった。二人の名譽会員が歓談される様子からは、感銘と羨望を禁じ得なかったが、帰り道に「せっかくのお誘いだけど、メキシコの富士山、僕は遠慮しとくよ」と麻生さんが言われた。「ニュージランドとそれほど違いませんよ。途中、バンクーバーでの休憩もありますし」と応じた私の声はか細かった。

今年の夏も終わろうとする頃、夫がスキーを担いで、陸イグアナが徘徊する熱帯の私の赴任地へとやってきた。高度順化は済んでいるというので、メキシコシティに戻った数日後、タクシーを奮発して雨季のポボカテペトルへと向かった。

この時期の登山者は至って少ない。幸いにも時折晴れ間が覗き、暖かで風も弱かった。ピオレとクランポンは必要だが、技術的に難しい山ではない。しかし、富士山頂より高い登山基地からの高度差一六〇〇メートルは、時に窒息してしまいう程きつい。スキー滑降できる距離は、雨季では高度差にして三〇〇メートルくらいなもので迫力には欠ける。夫は、敬愛する麻生さんとの思い出をこんな形で実現したかったのだろうか。

ノーマルなラスクルーサス・ルートを目指して降りてくる夫の頭から、ステッドソンの帽子が無くなっていった。

「麻生さんの帽子は？」頂上へ置いてきた。麻生のおじいちゃま、たくさんのお思い出をありがとう。

(ゲレロ州テクパンにて)

瀧山を行く

東北地区集會に参加

W・フォレスト

(林邦明)

前滝を通過して、天狗岩の尾根に降り付いた。そこから瘦尾根の急登となった。「あの山でも、こんな登りがあったかなあ」と、私は何年前に雨の中を登った会津の志津倉山のことを思い出していた。

木の根や固定された虎ロープに縋りながら、酒気の残る濁った息を吐いて喘いだ。前夜「親睦」を深め過ぎたことを、私はちよっぴり悔みつつ、瀧山の頂上に続くへらばき山を目指していたのである。

幼少の頃、瀧山がよく見える山形市内の家に、暫くの間滞在したことがあった。盟主たる蔵王の頂きは、瀧山の背後に隠れて見えなかった。幼心に、瀧山を「邪魔な山だなあ」と思ったものだ。だからその山名と青い大きなシルエットが、妙に強く、私の記憶の中に焼き付いていた。

山を歩くようになってからは、奥羽

本線の車窓から瀧山を眺めるたびに、是非一度は登ってみたい——と思うようになった。だが、私が居住する東京からは、何かの序があるならともかく、そのためにだけ出掛けるにしてはちょっと物足りない山だな——と勝手に決め込んで、果たさぬまま、無為の日々を過ごしていた。

この秋(九月十八・十九日)に瀧山で東北地区集会が開かれることを知ると、私は「これはチャンスだ」と膝を叩いて参加を申し込んだ。登る前夜は、山麓の宿で、久々に会う懐かしい岳友の顔に囲まれながら、芋子煮をつつき、大いに親睦を深めた。私の場合はつまり深め過ぎたきらいがある。

ともかくも、山はよく晴れて、秋の香りに満ちていた。山頂ではもったいないほどの展望が開けた。懐かしい岳友の顔と、踏み跡を残してきた懐かしい峰々に向かって、缶ビールを高く掲げ、「ウオーッ」と叫んだ。

熊野岳から雁戸山、仙台・山形両神室、面白山、御所山……と続き、最上の神室山あたりでその山並みが漸く空の色に溶け込んでいた。鳥海山と月山にはまだ白く光る雪が残っていた。長々と横たわる朝日連峰は、祝瓶山と障子ヶ岳に新しい思い出があった。飯豊の向こうで吾妻の連なりが空に溶け込んでいた。足元には、前日、行き掛

けの駄賃にと一稼ぎしてきた上山葉山・三吉山が、盆地の中で低く蹲っていた。(これで山形にある三つの葉山を登り終えたことになる)。

不忘山から吾妻連峰に続く県境稜線にある至って凡庸な風体の山に、何故か私は強く惹かれた。番城山(二三メートル)である。「うーん、あいつが私を呼んでいるな」と感じたのである。道などなさそうな山だから、雪の季節にでもスキーを履いて行かなければなるまい。

この集会に参加して瀧山の頂きに立ったことが、一面では私にとつての新たな山(番城山)につながる機縁となるのかもしれない——などと思いつつ、山毛櫨の繁る急坂を西藏王牧場に向かって下って行った。

早朝の礼文岳

—一九九三年八月—

松田孝一

一昨日は山形支部の山行で利尻岳に登った。はるばる北の国の山登りにきたのに、利尻だけではモッタイナイとばかり、一人で礼文岳を目指した。

まだ四時前だ。静かに出発する。この民宿の主人は、腕のよい漁師という。昆布採りの前に車で香深港にあるレン

タバイク屋まで送ってくれた。

スクーターを内路登山口に置き、すぐ急坂のジグザグを登る。途中、水平線に太陽が顔を出した。間もなく傾斜は緩く平坦になる。背丈ほどの笹原は、幅広く刈り払われて快適だ。ダケカンバの林になり、カラ類に混じり、ウグイスやコマドリの声も聞こえる。

歩き出して四十分、刈り払いのない起登臼コースが左から合う。ここから先は、刈り払われていない丈高い笹の朝露で、すっかり濡れてしまった。

三・四メートルピーク、ここからは頂上や海を隔てた利尻岳も見える。ハイマツ帯になり、高山気分だ。登山道の両側だけが並木状にダケカンバが続く。山稜の右をわずかにトラバースし、四〇〇メートルのハイマツの小ピークに達する。頂上が目前に迫る。

低い笹を分けてコルから登り返し、左を見れば、海霧の上に、利尻岳がすくっと立っていた。神秘的というか、幻想的というべきか。

ハイマツ帯の急坂を上れば、そこは一等三角点の礼文岳頂上だ。二つのケルンと標識のみで、三六〇度の大展望をさえぎるものはない。南に利尻岳から桃岩方面、北には、これも昨日行った礼文北端のスコトン岬、その先のトド島まで、四九〇メートルの標高とはとうてい思えない眺望のよさを、時の

たつのも忘れ、じっと独り占めにしていた。

北穂高岳に魅せられる

中井修二

北穂高岳を目指して、私が二年間に三度続けた山旅の懐古である。

最初は昭和六十年九月二十日、上高地から歩いて横尾山荘に宿泊。翌朝五時二十分、山荘前に出て刻々と変化する朝の雄大な景観にうたれる。日の出前から小鳥の前奏が始まり、薄暗い梓川面も夜の帳を上げる。東の空に茜雲が映え、黄金色の朝日に北穂高の頂きが浮き出たかと思え、その朝焼けの映えが空に拡がる一瞬は、山火事かともう。

本谷橋を渡り葛折の坂道を辿ると、樹林の陰影と北穂高岳の清澄さが対照的に目立つ。涸沢谷の樹木は早くも初秋の色彩。涸沢ヒュッテ着十一時。十二日は朝から雨で、天気予報は明日も雨。登山は後日とし、山を下る。

二度目は六十二年七月十一日、梅雨期で本谷橋は架してなく、左岸沿いに上流へ進み、川を被う雪を渡り、対岸の斜面を登り、右岸の登山道を辿り進む。沿道ではナナカマドの芽吹きと白

い小花に接し、このあたりを彩る初秋に思いを馳せた。午後四時、雪に埋め尽くされた涸沢に出たが、雨と雷鳴に気は急ぐも歩みが伴わない。北穂沢と奥穂高道の雪渓は共に悠々と涸沢を占めていたが、これを取り巻く穂高山群は雨と濃霧に遮られて見えない。涸沢ヒュッテ入りは午後四時三十分。翌朝は梅雨末期の集中豪雨で、ヒュッテの管理人「今日の豪雨では登山は無理、皆さんの下山を希望します」。私は激しい雨を突いて下山した。

最後は十月九日、午後四時にヒュッテに入る。涸沢全体が自然の豪華絢爛の色彩で素晴らしい景観だった。

翌朝七時の想い出。

抜ける如き 青空の下に
俺等^{おいらら}を待つか 北穂^{きたほ}の岳^{だけ}よ
今日^{けふ}を外^はせば 常^{とこ}しえに踏^ふめず
自ら招く苦痛^{くるつう}は 孤独^{こどく}の洗^{せん}礼^{れい}

北穂高岳に三度目で頂上に立った。四囲の眺めに見惚れて飽きず、頂きを広く楽しみ悦びは大きく、謙虚に反省して我が身に問うた。

何故^{なぜ}この山へ 涸沢北穂が招く
過ぎ去りし 追憶^{おひさし}の齢^よ八十路
迎える余生^{いとし}は 希望^{きぼう}の幻影^{えんげい}
忍苦^{にんこ}を越えは 頂上^{いただき}百年明るし
夕方下山した。飛び石連休でヒュッテは混雑。管理人「元気でですね、特別室にしましょう」と温かい心で接して

プラスチック製登山靴ご愛用のお客様へ

登山者の皆様におかれましては、日頃からプラスチック製登山靴をご愛用いただきましてありがとうございます。

さて、すでに新聞や山岳雑誌などの報道でご存知のように、昨年来、登山中にプラスチック製登山靴の突然破壊の事故が発生し、登山者の皆様に多大なご迷惑をお掛けいたしており、ここに謹んでお詫び申し上げます。

わたくしども取り扱い業者も不良商品の回収交換及び製造メーカーへの原因究明の申し入れをして参りましたが、突然破壊の原因につきましては未だ明確にされていないのが実情であります。

既に冬山シーズンに入っておりますが、登山者の皆様におかれましては、以下の事に留意され山行を実施されますようお願い申し上げます。

プラスチック登山靴の取り扱いに関するお願い

1: 使用上のご注意

- *ご使用前には、ブーツ本体・D環・フック等に異常がないか点検してください。
- *高温の場所に置くと変形したり、溶けたりする場合がありますので、乾かす際にはストーブやスチーム等の高温場所に近づけないでください。
- *ブーツ本体や部材が経年変化し、五年前後で本体強度が低下する場合がありますので、その後のご使用にはご注意ください。

2: メンテナンスの方法

- *使用後の汚れは水に浸した布や柔らかいスポンジでふき取ってください。
 - *シエルとインナーブーツはそれぞれ直射日光を避けて、風通しのよい場所で十分に乾燥させてください。
 - *保管には、シエルとインナーブーツをセットし、靴紐を軽く締めて日光の当たらない涼しい場所に保管してください。
- なお、この場合ビニール袋などで密封しないでください。

ご不明の点がありましたら、下記の取り扱い業者にご連絡いただければ幸いです。

プラスチック製登山靴品質対策委員会

(社) 日本スポーツ用品工業協会内

(03-3863-2473)

コフラック…(株)アシックス

078-303-2265

サンマルコ…(株)カザマススポーツインターナショナル

03-3861-6145

スカルパ…スカルパ・ジャポネ(株)

0429-71-2180

ダハシュタイン…コサ・リーベルマン(株)

03-3345-3562

ダイナフィット…(株)シークラフト

03-3481-7140

ローバー・ハンワグ…(有)タカダ貿易

075-432-4040

アゾロ…日本ノルディカ(株)

03-3770-1121

くれ、二段ベッドの上部に決めてくださった。ありがとう、深謝。

二番目の望遠地点 八剣山から富士山を見る

高島真一

私を含む聖護院の大峰奥駈修行で奈良県の大峰山脈を縦走中の一行は、八剣山の頂上で富士山を望むことができた。それは台風十三号が日本海を通過した翌日の九月五日の夜明けのことだった。抜けるような快晴のもと、かすかな雲の上にくっきりと浮かんでいた。その左には、南アルプスらしい連山をも遠望できた。まだ太陽の登らない前の二十分間くらいのことですぐ雲に隠れてしまった。

地図上での計算によると、富士山を望むことができる最遠の地は、和歌山県の法師山頂(一一二〇メートル)、二番目が奈良県の八剣山頂とのことである。

しかし、実際にこれを望めるチャンスはきわめて希なことだそう。今回はからずも、この八剣山から富士山を見ることができ、幸運を喜ぶとともに、地図上での計算結果を確認することができたわけである。

熊の平の『処女水』と 迷走登山

佐藤之明

今年は長雨と冷涼の夏、天候不順の秋を併せて経験することになった。

平常、雨男と自他ともに認めている者でも、こんなに雨天が続くと時間つぶしにひと苦労する。南アルプスにと山行計画を思いついて山行日記をめぐっていると、郵便配達がきた。出てみると、子供(成人)の関係で購読している「三田評論」が送られてきた。パラパラめくっていると、珍しい記事が目飛び込んできた。「山と水の環境の話」で、日本山岳会の自然保護委員会担当の大森弘一郎常務理事の記事であった。

それは八ページにおよび、専門的、学術的記述もあれば、野人にも楽しめる記事をサンドイッチのように挟むことができた。野人向きのテーマを例示すると、安曇節の替え歌、スイスの人工自然、水の循環とションペン、PPMの話、三尺流れれば水清し等々。

雑誌ともいふべき日記(山行の時だけ記録)をめくると、昭和六十一年八月十二・十五日の迷走登山(山行)が『処女水』の追記で目にとまった。

出張先から、我が家の山の神に三泊四日の山行荷造りを電話で注文した。

夜帰宅し、翌朝白馬方面と告げて、八王子に向かった。アルプス一号に強引に乗り込み、立っていると運よく茅野駅で座席にありつけた。夏の疲れが出てきたらしく、深い眠りに落ちた。

停車で気がつく、伊那大島である。十人ばかりの登山者の後を追って駅を出て、伊那の勘太郎を彷彿させる運転手と車掌の待っているバスに乗り込んだ。バスの入り口には大きなスコップと鋤簾が並べてある。聞けば土砂崩れを取りのぞくためだという。

三時頃であつたらうか、塩川の大部分手前の山崩れ地点から歩き、山伏峠を目指して独り夏の草いきれをついて登った。山伏小屋に八時頃到着し、遅い夕食を星明かりの下で静かにとった。

翌日は赤石岳に向かって歩くが、ふり返ると塩見岳が雲海に顔を出してこっちに來いと言っているようだ。エボシまで歩くがガスがかかり、視界ゼロとなる。

一人山行の寂しさの故かよくわからないが急に、塩見に戻ることになった。塩見小屋に到着すると晴れ上がり、雄大な山なみが展開し、解放感に浸った。小屋の一番客となり、持参したウイスキーを沢水で割って楽しんでた。

三日目は、北岳を目指して塩見を快

適に下っていった。途中、植物に詳しい青年と一緒に、コケモモとかの味を楽しむことができた。やがて熊の平小屋に到着した。新築されたばかりの小屋のロビーで休んでいると、金髪の美人が働いている姿を認め、いよいよ国際化時代などと感激した。

結局、熊の平小屋の一番客となつて、うまい湧水で水割りを楽しむことになってしまった。

午後三時頃であつたらうか。四十代の均整の取れたキャリアウーマン風の二人が、挨拶もなく小屋の受け付けに入ってきた。奥の管理人を呼び、傲慢な態度で「この小屋の水は大丈夫」と切り出したのである。よそ目にもこの手合いは、自分が世話になる山小屋に通りケチをつける登山者と見受けられた。

管理人は「この小屋の水は山腹の湧水であるから安全である」と言う。二人は懐疑的な表情で、山ヒルが流れ込んだ水を飲んで体内で血を吸われたり、昆虫が飛び込んで汚染された水を飲んで腹痛を起こしたら責任を取るか、などと一方的にまくし立てている。管理人は小屋で使う水は純粋な『処女水』ともいえる水質で安全であると言うのだが、二人は、他の山小屋の例を持ち出して何とか一本取ろうとしている。

この小屋の水は、地下のマグマ近く

から高圧で地表に突き抜けた水蒸気が冷却され、冬期に山頂近くの岩で冷やされて真水となり、岩の断層から噴き出したところを取水しているから安全だと言ひ、『処女水』を冷却して、熊の平の山神様が恵んでくれている、と締め括って中に入ってしまった。

二人は何かよくわからない反応に戸惑ったようだが、再度管理人を呼んで宿泊の手続きをした。寝場所を指定すると、管理人は食事の準備にとりかかった。

二階への入り口でやり取りしていた二人のキャリアウーマン風の会話と表情をいまだに忘れることができない。「私たち、女学校時代に『処女水』っていうのがあったかしら」この二女史が日本山岳会と無縁であることを信じて、日記より拾って書いてみた。

私の育った里は、世界一の水といわれた東丹沢の早戸川（横須賀軍港用水・市水道）だが、中学の理科の先生から、もっとよい水に『処女水』があると教えられた記憶があり、熊の平の処女水論争に雑知識も水のように大事であると感じたことである。

北岳の混雑を避けるように広川原に下り、迷走登山を終えて、夏休みを締め括った。今夏は甲武信山域ナメラ沢に入り、『処女水』に近い山水を岩の割れ目からじかに飲んで帰った。

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況をレポートします。

熊本支部

九州四支部合同会議

九州四支部合同会議が九月二十五、二十六日の両日、熊本県阿蘇で開催された。会議には九州四支部から総勢四十六名が参加、初秋の阿蘇を舞台に四支部の懇親を深めた。

二十五日は午後六時から阿蘇高岳の北麓、一の宮町の「民宿阿蘇の四季」で会議と懇親会が行われた。

会議では各支部の現況報告のあと、今後の合同会議の運営、自然保護、屋久島、鹿児島支部、海外遠征などについて問題提起と意見交換が行われた。七時から始まった懇親会は大広間に一同に会しての宴会となり、飲み、食べ、歓談して大いに盛り上がった。こ

のあと部屋を移しての二次会が夜半まで続いたのは言うまでもない。

素晴らしい晴天となった二十六日は、阿蘇高岳（一五九二メートル）への親睦登山を行った。ルートは高岳の登山基地、仙酔峡からノーマル・ルートである仙酔尾根を山頂へ向かった。溶岩の急な尾根を登り、十時半、頂上稜線に達したところで、熊本支部の馬場会員（チョモランマ三國友好登山隊員）



快晴の阿蘇高岳山頂で記念撮影・九州四支部合同登山

によるパラグライダーの飛行ショウがあった。

風が強くて飛行にはあまりよい条件ではなかったが、多くのギャラリーの見守る中、意を決して飛び立ち、十分ほどで仙酔峡に無地着地した。

十一時、雄大な眺望の山頂に着き、記念写真と昼食をすませた後、中岳経由で下山。一時少し過ぎ、再び仙酔峡にもどった。

四支部合同会議発足のきっかけは、当支部創立三十周年記念集会の二次会の席上であったと記憶している。今年、再び当支部の担当となったのを機会に、四支部の交流をさらに深めようと、合同会議を各支部の例会に組み入れていただいた。おかげで多数の会員に参加してもらったことができ、親睦を深めることができた。今回の合同会議が四支部交流の新たなきっかけになれば、と念願している。参加各位に対し、改めて厚くお礼申し上げます。（田上敏行）

越後支部

「越後山岳」第九号

ご案内が遅れましたが、平成五年四月に当支部の機関誌第九号が刊行されました。第八号以降三年間にわたる会員の歴史、紀行、論考、随想など二十

八編を収載したもので、渡辺欣次会員による越後の山の美しい版画十五点が誌面に彩りを添え、片岡博氏、小倉厚氏の寄稿もいただきました。

藤島初代支部長の遺稿「波富垂（オセアニア）記」は在りし日のお人柄が偲ばれる克明な海外旅行日誌で、行間に懐かしい面影が蘇ります。

深田久弥と頸城山塊（蟹江健一）、越後における飯豊山信仰（本望英紀）、越後の山々散策（筑木力）、越後の高山植物（加藤明文）、文化現象としてのアルピニズム（田中純夫）、八十里越・歴史と沿革（平田静一郎）、ナムチャ行五十首（小倉厚）、博士山今昔（森沢堅次）などの充実した内容は、読者のご好評をいただけるものと確信しております。越後の山のガイドブックとしても、お役立ていただければ幸いです。

A五判 四一五ページ 三〇〇〇円
〒951 新潟市営所通一番町 学生書房 日本山岳会越後支部へ、葉書でお申し込み願います。（佐藤一栄）

北海道支部

南白水岳観月山行

恒例の観月山行を今年は道南の南白水岳で行いました。この山は二、三年



笑顔がまぶしい、好天の南白水岳頂上で

前に道がつけられ、熊石のひらたない温泉の奥が登山口になっています。十月二日、三々五々ひらたない荘に集まり、午後六時から会食。月は出ていましたが、何人が月を見たかは不明です。

三日は好天に恵まれ、三・五キロ奥の登山口駐車場に車を回し、八時半出発。白泉岳のあたりで、後ろを振り返

資料寄付のお願い

登山の用具、記録など、整理するとき考えてみてください。他に寄付する前に山岳会へ、捨てる前にも再考を。

資料委員会

ると、七月に大地震のあった奥尻島が、何ともなかったように海に浮かんで見えます。やがて目的の南白水岳（一二二メートル）の頂上着。登り約三時間。元気な一人は往復三キロの白水岳まで五分で走って行ってきました。南白水岳は道南の山の中でも、美しいブナ林があり、登山口には自由に入れる野天風呂がある、登りやすい山です。

【参加者】野田、中村、石原、森下、向井、木下、佐々木、加藤、長谷川、岸、藤野、柳田、遊座、牧田、海川、桜井、横内、鳴原、石井、山下、大久保、他六名

(大久保五郎)

支部創立二十五周年記念山行 日高山脈・イドンナップ岳

記念山行の参加希望者は、支部会員三十六名、他支部会員五名、家族その他二十一名の六十二名に達した。

七月十七日早朝、快晴のJ・R札幌駅前を出発し、正午J・R新冠駅前で札幌以外からの参加者も集合し、地元新冠山岳会から会長以下六名の支援を得てイドンナップに向かった。夕刻、恒例のお天祭りを新冠山岳会のイドンナップ山荘で盛大に行った。

十八日、午前四時十分登山開始。最初は日高特有の沢歩きとなり、数回徒渉を予定していたが、地元山岳会の手

で飯の橋が架けられて、靴を濡らさずにすんだ。やがて川から離れ、旧馬搬道を辿り、売山の鞍部に達した。この辺りから本峰登頂を目指す沼崎リーダーのガンバリ隊と、新冠富士を目指す水科リーダーの楽歩隊、望湖のカベ上を目指す浅利リーダーのビスタリ隊と、間隔は際立ってきた。

望湖のカベ上では遠く十勝岳・芦別岳・夕張岳・暑寒別岳・手稲岳などが見渡せ、また足元の紺碧に澄んだ新冠湖は白鳥が大きく翼を広げて飛び立つ様に似て、しばし感動に酔いしれた。

しかし、今まで夏道がなく、沢詰め敷漕ぎに悩まされたイドンナップはまだはるか、幾重ものアップダウンを繰り返して高度を上げる。途中生々しいヒグマの糞が数箇所見られ、警戒に身が引き締まる。

ガンバリ隊は新冠富士を午前八時に通過し、イドンナップ標高点に達した。これまでは北部日高の幌尻岳・戸蔭別岳の残雪のカールや雪渓が望め、さらに中部日高のカムイエクウチカウシ山・コイカクシュサツナイ岳・ペテガリ岳などが望めたが、この辺りからお天気が怪しくなり、見る見るうちに視界は閉ざされ、白一色の中で這松と岩稜のアップダウンを繰り返す。

午前十時四十分、ガンバリ隊はイドンナップ岳本峰（一二七二メートル）

に登頂し、塩ビ製の頂上プレート打ち込み、沼崎リーダー・中村サブの音頭でバンザイを歓呼する。この頃新冠富士の頂上でも楽歩隊により頂上プレートを打ち込み、遠来の福岡支部長吉村健児氏の音頭で故今西錦司氏式バンザイと冷たいビールが交わされた。

各隊それぞれ下山開始の頃には、ポツポツ雨が降り始めたが、午後四時には全員無事下山し、登山口で解散する。今回の記念山行は無雪期での記録資料がないうえ、偵察時とは山状も異なりかなり難渋したが、一人のアクシデントもなく山行を終えたことに喜びを味わい、さらに支援の新冠山岳会の方々に感謝しながら帰路についた。

【参加者】吉村健児（福岡）、渋谷正己、高澤光雄、浅利欣吉、平野明、新妻徹、桜井仁、大山幸太郎、柳田涼子、野田四郎、西孝子（東九州）、亀井秀子、向井成司、中谷絹子（関西）、井後幸太郎、小野肇、沼崎勝洋、水科行雄、大久保五郎、澤尻利弘、長谷川耕司、森下雅之、岸恒方、萩原裕、上島忠義、米村清一、阿部和代（東九州）、清水國通、吉村啓一、榎田俊二、白井直器、中村喜吉、山下静江、白井幸彦、長谷川啓子、蔵富幸夫（福岡）、真下誠二、原幸多、佐々木松男、ほか会員外二十七名

(水科行雄)

図書紹介

久保田展弘著・新妻喜永写真
『神の山へ』

山岳宗教の源流を行く

仏教哲学者と山岳写真家の、いずれが主役とも言いがたい、すぐれた写真文集である。

まず写真だが、単なるノスタルジアではなく、白黒写真であるが故に、山にたどる霊気が見事に表現されているようにも思われる。

ヨーロッパの山岳には悪魔が棲んでいたが、日本の山には神々が棲んでいた。ところが仏教が公伝して日本列島に定着すると神仏習合が行われ、とくに平安時代になると日本独自の宗教である修験道が生まれる。在来の山岳信仰に仏教、道教が融合したものだ。日本人は独創的な能力に欠けるが、外来のものを巧みに吸収して新しいものを創り出す才覚をもっている。しかし、

その中で山岳宗教は、ミックスしながらも日本本来のものを残して、独自の性格をつくりあげている。そんなことを頭に入れて読むと、難解な部分もある文章が理解できる。

この中に沖縄が入っていないのが残念だが、北は北海道から南は九州まで十三の霊山霊地をとりあげているので、ほぼ日本列島を縦断している。

一読して感じるのは、筆者のいわゆる通り「森と水」が物心両面でいきもの生活を支え、信仰、修行の世界が自然を守り、自然が信仰を育んできたといえるだろう。

日本に限らず、結局自然保護は人間保護でもあるのだということを我々人間が自覚しない限り、開発という名の破壊は続く。

ちょうどここまで書いたところで、高尾山近くにある金刀比羅山の造成中止のニュースが流れた。道路にかかる私立学校が市から代替え地をもらったのが、金刀比羅神社とその境内で、立ち退きを迫られた神社信徒と周辺の自然を愛する人達が保存運動を展開した結果、工事撤収を勝ちとった。七年ぶりの決着だという。信仰と自然保護活動が結び付いた好例だと思いつつ、この本をもう一度読み返した。

山と溪谷社刊 二、八〇〇円

(伊佐九三四郎)

小泉武栄・清水長正編
『山の自然学入門』

日本の山の登山ガイドブックの数は近頃とみに増えているようだ。しかし対象となる山の選択や記述内容は大同小異で、利用主体を変えたり、地域区分を変えたり、要するに編集・出版者側の目先変更にすぎない。

ここに紹介する本は直接的な登山ガイドブックではないが、山に登ってから、あるいは何を目的に当該の山に登るかをガイドしていて、いうなれば利用する側に別の視点を提供している。

山という高まりは、「地形」そのものである。この山の地形を研究する若手グループ(寒冷地形談話会)のメンバーがそれぞれの得手のフィールド、北海道の利尻岳から屋久島宮ノ浦岳までの六十山一地域について視覚的に目立つポイントを研究成果に裏付けられた平易な文章でまとめた、地形を中心とする自然解説である。説明の補足として地形図やダイアグラムをたくさん用い、「地形写真」がカラーグラビアとして挟み込まれている。

日本の高山を彩る高山植物や高山蝶は氷河期の遺物とされるが、地形そのものも同様で、寒冷環境こそが日本の山岳景観を決定づけた要因である。キーワードの一つは「化石周氷河地形」

である。日本アルプスや多雪地方で見られる森林限界を抜けた山稜部の緩傾斜地の成因は、寒冷環境下における物質の移動によって形成されたことが各地の山岳で確認されている。

この種の本は一九七〇年代以前では小林国男氏の『日本アルプスの自然』が唯一のものだった。三十年をへてようやく日本の主だった山の成り立ちが説明されつつあるのは、やはり日本の山の登山が容易になったことと大いに関係がありそうだ。

一九九二年九月二十八日 古今書院
一七八ページ 二、四〇〇円

(児玉茂)

沢 聰著
『句集・縦走路』

妙に岳人の共感をそそる句集である。俳句に関心のないものにも親しみやすく、自然に理解できるのも魅力である。奥秩父白く寒き日峰つたふの巻頭句にはじまり、

雪嶺を恋ふ雷鳥の唳れし声
の結びまでの六〇八句、読者にとっても数々心当たりの山行を思い起こさせる。

筆者は日本山岳会会員であると共に俳詩「馬酔木」の同人中の重鎮。とくに数少ない山岳俳句の作者としての存

在は大きい。中央アルプスの山懐伊那谷を故郷に持ち、学生時代より山の俳句に取りつかれ、昭和三十一年には第一句集「檣道」を刊行し、今回「縦走路」は昭和五十九年から十二年間の実録と聞いている。

孔雀蝶羽に威嚇の眼が妖し

南アルプス縦走中の一句と思われる。夏場の尾根歩きでは必ず眼に触れるあの四つ目模様のタテハ蝶である。三〇〇メートル級の尾根筋までも飛来し、岩に羽根を休めひろげて見せる。その眸模様の中に光る瑠璃色の小さな点、そんなものまで見逃さない自然愛の心底。反面には偉大に広がる岩山をも彷彿とさせる山男の孤独さもちょっぴり覗かせて……。

そして随所に現れる蝶、鳥、空飛ぶ小動物は屏絵のクモマツマキチョウ、蝶ヶ岳のスケッチ、結び句の雷鳥に至るまで無作為の韻となつて、縦走路に快いリズムとハーモニーを醸し出している。句集にありがちな難解な言葉、ルビの必要な文字等ほとんど使用されず、何とも読みやすい句集である。

山岳俳句に興味を持たれる方はもちろんのこと、私共初心者にとっても座右にふさわしい一冊である。

平成五年四月十日発行 ふらんす堂

A五判 二二六ページ 定価二、七〇〇円
(勝田房治)

ルドルフ・ヴァイス編
『アルパイン・デイクシヨナリー』

ドイツで標題の登山用語辞典が出版された。ドイツ語、英語、フランス語、イタリア語の四か国語で構成されていて、四か国語が並列で記されている。それぞれの国の言葉が見出し語になっていて、どの国の言葉からでも検索できる。日本の登山用語は国籍不明語が多く、また各国語を取り混ぜ、ごった煮のような使われ方をしている。この辞典を参考にすれば、これまで使用していた言葉が、どの国の言葉であったのか、たちどころに判明する。我が会の「会報」や「山岳」に寄稿なさる方は、今一度この辞典で、これまで使用していた外来登山用語をチェックされるのもよいのではないだろうか。ごく一例を次に記しておく。(田村俊介)

ENGLISH GERMAN FRENCH ITALIAN
ice axe Pickel piolet piccozza
ledge Band vife cengia
mountain Berg montane montagna
/monte
ridge Grat arete cresta
rope Seil corde corda
“Worterbuch alpinen Begriffe”
Rudolf Weiss, Bergverlag Rudolf
Rother GmbH, Munchen, 451 p.

書籍・雑誌 受入報告 1993年10月

著者	書名/雑誌名	版型・頁	出版元	出版年	寄贈/購入別
内田良平	アンナプルナ周遊 (ネパール3部作・完結編)	127 pp/26 cm	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
岡島成行	アメリカの環境保護運動 (岩波新書 No. 142)	233 pp/18 cm	岩波書店	1993	著者寄贈
ジョン・ミューア	はじめてのシエラの夏 (訳: 岡島成行)	238 pp/20 cm	宝島社	1993	訳者寄贈
石原きくよ	山を想えば人恋し: 北アルプス開拓の先駆者・百瀬慎太郎の生涯	211 pp/21 cm	郷土出版社	1993	出版社寄贈
岡村治信	山と法則: ある裁判官の自伝的百名山紀行	315 pp/19 cm	山と溪谷社	1993	著者寄贈
日本気象協会 (編)	夏山の気象観測表 (平成4年)	209 pp/26 cm	日本気象協会	1993	発行者寄贈
森林書房 (編・製作)	遊歩百山: 初夏から夏の山歩きコース集 (No. 6)	144 pp/26 cm	山と溪谷社	1993	出版社寄贈
渡辺志郎 (編)	遊歩百山: 秋・冬のコース集 (No. 7)	144 pp/26 cm	森林書房	1993	出版社寄贈
	Royal Anglian South Georgia Expedition (リポート)	86 pp/27 cm		1992	中村保氏寄贈

日本山岳会蔵山岳地図目録 7 (追加)

A官製 B個人、団体 aシリーズ b単作 c付録 d概念図 eその他

分類番号	発行者	発行年	地名	縮尺
A 1-6 a	Institute Geographique National	1960	ILES KELGUELEN Nord Ouest	1: 100,000
A 1-6 a	Institute Geographique National	1960	ILES KELGUELEN Sud Ouest	1: 100,000
A 1-6 a	Institute Geographique National	1960	ILES KELGUELEN Est	1: 100,000
B 7-2 b	SSAF	1965	PANTA	1: 25,000
B 7-2 b	SSAF Berg der welt 1951	1951	SUD PERU	C 1: 1,200,000
B 7-2 b	Journal of SSAF III-10	1961	SUD PERU	1: 1,000,000
B 7-4 d	岩田修二 岩と雪 44号	1975	CERRO FITZ ROY	C 1: 42,000
B 7-4 d	岩田修二 岩と雪 44号	1975	CORDILLERA DARWIN	1: 250,000
B 2-1 d	West Col	1992	MOUNT ELBRUZ REGIN	1: 80,000
B 3-2 d	SSAF	1985	GHWAL HIMALAYA WEST	1: 150,000

・会務報告

十月定例理事会

日時 十月十三日(水) 十八時三十分
二十時三十分

場所 日本山岳会会議室

出席者 藤平会長、嶋原・中村副会長、小倉、大倉、大森、村井、山口、片岡、南川、松浦、伊藤、水野、南井、渡辺、溝口、中川、山本、大谷各理事、中島、川崎各監事、斎藤、宮下、神崎、重広、各常任評議員

〔委任〕堀井理事、湯浅、西村常任評議員

議事に先立ち、天山山脈踏査隊・相馬勉隊長からキルギス登山(九月四、十九日)の報告と挨拶があった。

◆議事

〔審議事項〕

一、日本三〇〇名山の新ハイキング社より出版通知について 小倉

JAC選奨のものであり、登山禁止(普賢岳、焼山等)のことに留意を求めている。承認

二、ヤルツアンボー川探検隊・搜索の名義後援について 小倉

九月十日、武井隊員行方不明により搜索支援協力隊の名義参加要請。承認

三、年次晩餐会における会長特別表彰について 小倉

脇坂順一氏(八十歳で海外登山一五〇峰達成)。

承認

四、中間監査について 中島監事

十月十二日実施、支出は妥当。承認

五、現在の財務について 大倉

会費納入は順調で財務はおおむね良好。主な支出は、職員一名増、海外出張、パソコン、山研雑費、山岳総合案内等。タンボチェ僧院寄付金は、宮沢職員が現地で寄贈し、会計完了。承認

六、九十周年事業について 小倉

①ルーム拡張(長期的準備委員会検討)②データバンク(研究調査の小委員会設置)③九十年史(百年史・記念誌の準備)④海外遠征(マカルー北西)⑤ブロック別記念式典(総務、受益者負担方式)⑥記念フォーラムの開催。以上のための準備委員の選任を十一月十一日の理事会までに進める。

承認

〔報告事項〕

一、海外登山基金 嶋原

四隊に交付(三隊登頂、一隊撤退)、来年度分は十二月三十一日締切り、会報「山」十月号に掲載。

二、年次晩餐会 中川

十二月四日(土) 新高輪プリンスホテルで。アルパイン・スケッチクラブによる絵画展を開催。

三、プラスチック登山靴

労山から協議要請。「山」十月号掲載。

載。

四、山研について 溝口

①利用者中間報告(四、九月計六百二十一人)②FAX設置(〇二六三一九五二六三五)③表示・保存登記済

九日④諸工事(水止め、排水、雪囲い、110A電力増設)⑤閉所・十月三十、三十一日の予定 ⑥補助金事務・十月中に完了、報告書提出予定。その後、自転車振興会による現地調査の予定。

〔各委員会報告〕

●学生部 マラソン大会(十一月十四日・皇居周辺、団体・個人を行う)

●科学委員会 ①気象講演会開催計画(十月十六日、ナムチャ・マッキンリーの気象)②雪崩シンポジウム開催計画(十二月十一日)③マッキンリー気象観測報告(大蔵喜福氏)

●青年部 ①JAC青登懇打ち合わせ(九月十七日)②天山山脈踏査隊帰国(九月二十日)③JAC青登懇第四回打ち合わせ(九月二十九日)④例会・天山山脈踏査隊報告会(十月六日)⑤JAC青登懇第五回打ち合わせ(十月七日)

●高所登山研究委員会 日本山岳会マカルー峰北面登山隊の許可申請を九月十三日、中国登山協会およびチベット登山協会に提出。

●自然保護委員会 ①自然保護全国集会(九月十一、十二日、戸倉・ロッジ

長蔵)②鳥海山問題。

●自然保護専門委員会 ①第一回、山の自然保護現地講座を実施(十月二、三日、木曾駒ヶ岳、二十三名参加)②

現地講座については朝日新聞で紹介された結果、約百名の希望者があり、今後の計画を再考中 ③環境事業団の地球環境基金に「山岳自然保護観察指導員の養成および一般登山者の自然保護意識の啓蒙」のプロジェクトが内定

④絵葉書による基金づくり(原価七十九万円の回収は現在三十三万六千円。基金はマッキンリー隊に三十一万四千円、自然保護に三十七万七千円。いっそうのご協力を)

●図書委員会 「山の本シリーズ」を新企画として始める。第一回を十月二十八日、小林静生氏を講師に迎え、ルームで開催。

●資料委員会 ①上高地山研資料室の一部配置換え・修復、湿気対策を十月三、四日に実施 ②講演会(十一月十三日、講師・中川喜久雄氏、ルームで)

●フィルム委員会 アルパインフォト・ビデオクラブ主催で写真展を開催する(十一月二十、二十九日、西新宿三省堂文化会館エントランスホール)

●総務・集委員会 ①新入会員懇親会(十月十六日、総務)②火山を読む(十一月十一日、集会)③テーピング講習会(十一月二十四日、集会)④年

29日	常任評議会	10月来室者554名
28日	図書委員会 (講演会)	
27日	科学委員会	
26日	自然保護委員会	
25日	資料委員会 集会委員会	アル
22日	自然保護委員会 (講演会)	
21日	フォト・ビデオクラブ	
20日	三水会	
19日	フィルム・ビデオ委員会	
18日	総務委員会	
16日	科学委員会 (気象報告会)	
15日	山研委員会	
13日	理事会	
12日	二火会	
6日	青年部	
5日	図書委員会	スケッチクラブ
4日	連絡委員会	

ルーム日誌

(10月)

次回理事会 十一月十一日(木) 十八時三十分より 日本山岳会会議室

■新人会員承認 黒田守彦他三十四名、内復活一名。

次晚餐会(十二月四日、総務) ⑤懇親山行(十二月五日・丹沢弘法山、集会) ⑥八方尾根スキー集会(一月十五〜十七日、集会)

◆第七回 後藤三男油絵展
信州の山と安曇野、ヨーロッパの風景画を展示します。
日時 平成六年一月十四日(金)〜十九日(水)
場所 日本橋東急 六階 美術画廊

◆新春山岳映画のタベ
フィルム・ビデオ委員会
福原健司氏のご好意により同氏の往年の名作を上映することになりました。
日時 平成六年一月二十一日(金) 午後



この電話でもお知らせしています

■会員異動
▼物故 小林基子(四五六五) 5・10
・8 三島昌夫(六一一五) 5・10・17 岡田幸千生(七〇一一) 5・10・24

山研・ナムチャ合同募金応募状況
(十一月六日現在)
(二口) 松本潔
(累計 二六六一名 八六八八・一口 四千三百五十五万五千九百六十一円)

七時より上映
場所 山岳会ルーム
会費 五〇〇円(お茶菓子代)
上映プログラム
*「JOY TOGETHER」
―スキーと友情― 五十分
第一回赤十字映画祭短編部門
最優秀作品
*富士山直滑降 三十分
三浦雄一郎冒険スキー映画
文部省選定作品
*白馬連峰の自然 二十五分

◆第二十二回山岳史懇談会
図書委員会
「もう一つの登山史・陸地測量部の登山」をテーマに、懇談会を開きます。
日時 平成六年二月二十五日(金)六時三十分より
場所 山岳会ルーム
講師 佐藤悦氏(国土地理院OB)

■編集室から■
*原稿締切りは発行日(毎月二十日)の前月の十日です。とくに「お知らせ」欄の投稿では、会合等の開催期についてお気をつけください。
*ときどき、会報発行日以前の開催期の原稿がきますが、これは間に合いません。また、開催期日が二十〜二十

七日頃のもの、前月号に掲載になるよう、前々月の十日までに投稿してください。
*もう一つお願い。締切り以降の投稿もときどきありますが、割り付け後では他の原稿を二、三行ずつ削ってスペースを作らなければなりません。割り込みはできるだけ遠慮ください。
*急を要する投稿は左記へ
奈良原町子宛
FAX・03・3334・8113

七月号(N〇五七九)から編集委員会が交替して、ちょうど半年。「読みやすい文章と紙面構成」をモットーに編集してきましたが、いかがでしょうか。さらなるご叱正をお願いいたします。
恒例の年次晚餐会も盛会のうちに終り、新しい年を迎えようとしています。来年もどうぞよろしく。
よいお年を！(会報編集委員一同)

日本山岳会会報 山 583号
1993年(平成5年)12月20日発行
発行所 社団法人日本山岳会
〒102 東京都千代田区四番町
5-4 サンビュウハイツ
四番町
TEL 東京(03) 3261-4433
振替口座 東京 3-4829
発行者 藤平正夫
編集人 伊藤 敏
印刷 株式会社 技報堂